

# 資本主義の歴史的発展と

## 『資本論』の読まれ方\*

小幡道昭

2017年9月16日

### 1 『資本論』と「経済原論」

■ 『資本論』前50年 私は長い間「経済原論」として『資本論』を読み、「マルクス経済学の経済原論」を講義してきました。この「経済原論」ということで申しますと、『資本論』150年にあたる本年2017年は、奇しくもデービッド・リカード(1772 - 1823)の『経済学および課税の原理』200年、さらに、もう50年さかのぼると、ジェームス・ステュアート(1713 - 1780)の『経済学の原理』250年の年にあたります。

■ 「原論」として読む「経済原論」は「経済学原理」と同義ですが、そもそもその「原理」とは何かというと、ユークリッドの幾何学原理や、ニュートン力学のプリンキピアが模範で、基本は、“用語を明確に定義し、単純な仮定から一般的な法則を導出する演繹的体系にあるのではないか”と私は考えております。経済学の書名に「原理」principlesを冠したのはステュアートがはじめだときいています、それを目に見えるかたちにしてみせたのはリカードです。はじめにアダム・スミスの『国富論』の価値論がダブル・ミーニングだと批判し、投下労働価値説に一本化し、価値の量を厳密に定義した後、これを前提に、社会全体の総生産物を集計し、生産が拡大するなかで、地代、賃金、利潤の分配法則を導きだすその体系は、まさに「原理」そのものです。

とはいうものの.... いま“『資本論』を「経済原論」として読んできた”と申しましたが、マルクスの『資本論』は、同じく「原理」といって見ても、リカードの『原理』とは大きく異なっています。“『資本論』を「経済原論」として読む”といっても、それはリカードの『原理』との違いを明確にするものでなくてはなりません。

では、両者の違いはどこにあるのか、これは『資本論』のテキストをちゃんと検討して答えるべきことなのですが、私の結論のみ申し上げますと、次の二点になります。すなわち、“対象のもつ歴史性”と、“原理のもつイデオロギー性”、この二点です。

歴史性というのは、経済原論の対象が歴史的に変化するという点に関するものです。リカードの原理がでたのは1817年ですから、イギリスにおける10年周期の恐慌の発端を

---

\* 『資本論』刊行150年記念講演会 口述

なす 25 年恐慌のまえです。50 年後にマルクスがみていた、恐慌現象を繰り返す 19 世紀中葉のイギリス資本主義ではありません。どんなに演繹的推論を精緻に展開しても、リカードの時代に周期的恐慌を理論化するのは無理で、その時代にはそうしなかったほうがむしろ「正しい」のです。ないものを頭のなかでこしらえてしまうよりは.... いずれにせよ、『資本論』は、原理論の対象が、ある時代にある条件のもとで生まれた社会である、という資本主義の歴史的性格を明らかにする、という独自の課題を明確にしています。この点が、リカードの『原理』との大きな違いであるといつてよいでしょう。

二番目のイデオロギー性という話は、この資本主義の歴史性と密接に絡んでいます。演繹的な理論というのは、もともとそれ自身、コンシステントな単一の体系を生み出す性質をもっています。古典派経済学も、演繹的な原理を駆使して、単一の経済社会像をこしらえる傾向がありました。おまけに力学や天文学と違って経済学は検証部分が弱い。理論は頭でっかちになり、数学的な意味での厳密さばかりが重視される、ということになります。そのため、どうしても、この単一像に、経済社会の究極のすがたという意味を与えてしまう。客観的な科学を媒介に、特殊な社会的価値観を普遍的なものとする作用、つまりイデオロギーの作用があるのです。

要するに、原理論といつても経済学の場合、その対象が歴史的に変化するものであり、演繹的な理論で単一の理論像をこさえて、これを理想化してはならない、ということになります。

重要なのはこの先です。私が強調したいのは、マルクスの古典派「経済学批判」がけっして「反経済学」ではなかった点、「原論批判」がけっして「脱原論」ではなかった点です。「原理」を相対化し、何かと折衷するのではなく、逆に“原理を原理として徹底することで、原理を批判する”、いわば「原理を批判する原理」に発展させた点です。マルクスは、表層的な現実を原理に反映させる経済学を「俗流経済学」とよび、これに対して、リカードに典型的な「古典派経済学」の演繹的原理を高く評価しています。「歴史を理論的に解明する」ということは、「歴史を理論に反映させる」という意味ではありません。資本主義の歴史性を対象とした原理論を再構築するという意味です。

ただ、これはたいへん難しいことになります。古典派経済学のイデオロギー性や非歴史性もまた、偶然の産物ではないことになります。それはある意味で、原論的思考を経済現象に適用しようとする試みにつきまとうものです。これは、どんなにこの限界を自覚したとしても、そうした自覚だけでそれを乗り越えることはできないことを意味します。

とすると、このような時代的制約は、『資本論』にもついてまわることになります。たしかにリカードの『原理』から 50 年の歳月を経るなかで、『資本論』は古典派経済学のイデオロギー性や非歴史性を対象化することはできました。しかし、原理で原理を批判する困難そのものを免れたわけではありません。『資本論』もまた、1867 年までのイギリス資本主義の現実をふまえ、独自のイデオロギー状況のもとで書かれた歴史的著作なのです。それは資本主義のイデオロギー性と歴史性を批判的に解明する原論であると同時に、また特定の歴史性と独自のイデオロギー性が刻まれた原論でもあります。

■ 「読まれ方」を読む この報告のタイトルの「読まれ方」というのが気になった方もいらっしゃるかもしれません。私が言いたかったのは、歴史的環境やイデオロギー状況を見無視して、ただ『資本論』の「読み方」を考えるのでは「原理を批判する原理」にはならないという点です。ある状況 X で「書かれた」書物は、著者の知りえぬ新たな状況 X' のもとで「読まれる」わけです。そしてこの「読まれ方」にもとづいて、新たな状況 X' が「書かれる」わけです。この「読まれ方」を、資本主義の歴史的發展のなかで、客観的に評価することなしに、ただ真の『資本論』の正しい「読み方」を探るのでは、それがどんなに綿密で客観的な考証によったとしても、実は、マルクスが批判した近代啓蒙主義を抜け出すことはできません。歴史に埋もれた真の『資本論』を過去に向かって発掘するのではなく、『資本論』150年の「読まれ方」を客観的に読む必要があるのです。

## 2 『資本論』元年

■ 『資本論』の刊行過程 ということで、このあと『資本論』150年の歴史を30分で話そうというのですから、これはムチャです。ここではポイントのみお話ししますので、詳しくはWebの報告論文のほうもご覧ください。さて...

『資本論』元年」ということで、『資本論』が最初どのように読まれたのか、その「読まれ方」かたからみてゆきます。後でもふれますが、日本では『資本論』100年のときに、この100年分の総括がもうすでにたくさんでているので、ここでは最初の100年分はうんと圧縮して、私が重要だと思う点だけ指摘することにします。

『資本論』がどのように歴史に埋め込まれていったかを知るうえで、その刊行過程をたどっておくことは欠かせません。ポイントは二つあります。一つ目は、『資本論』は第一巻初版が1867年にでて、このあと第2版が1872年(DK6年)から、そしてフランス語訳、ロシア語訳も同じ年に刊行されます。ところが、第二巻となると、マルクスが没した1883年のあと、エンゲルスの編集により1885年(DK19年)、第三巻は同じくエンゲルスの編集で1894年(DK28年)に刊行され、この翌年エンゲルスも没しています。20歳のときに第一巻を読んだ読者が第二巻を目にするのは38歳のとき、第三巻を手にしたときにはもう47歳です。かれこれ四半世紀の間、1870-80年代当時の読者にとって、『資本論』といえば、第一巻を意味し、それはそれ自身完結した体系として読むほかない、事実またそう読める書物だったのです。

二つ目は、英語版がなかなかでなかったという問題です。第一巻初版は1867年にドイツ語で、続いて1872年(DK6年)からフランス語版とロシア語版が刊行されましたが、英語版がでたのはだいぶ遅れて1887年(DK21年)です。つまり、長い間『資本論』が読めたのは、ドイツ語圏、フランス語圏、そしてロシア語圏の読者にかぎられたこととなります。これは『資本論』がどういうネライで「書かれた」のか、という問題に密接に関わってきます。

要するに、『資本論』は第1に、第一巻完結型の「読まれ方」をされたこと、第2に、内容はイギリス資本主義なのに、読者層はドイツ語圏、フランス語圏、そして意図せざる結

果としてロシア語圏であったこととなります。

■第一巻完結型 『資本論』を第一巻で完結した著作として読むとどうなるのか。第一巻はマルクス自身が改訂を加えよく練り上げられた著作で、第一巻を読み終えて、“さて何が書いてあったのか”、ふりかえってみれば、その概要はすぐわかります。私の目には、前半は「搾取論」、後半は「崩壊論」の二語にまで圧縮されます。前半の「搾取論」は、一言でいえば、労働力が一般商品と同じように価値どおりに売買されることで、資本のもとに剰余価値が必然的に形成されるという理論です。後半の「崩壊論」は、こうして形成される剰余価値が蓄積されてゆく過程の行き先に関する理論です。『資本論』にでてこない“崩壊”というタームは誤解をうむかもしれませんが、要するに、蓄積がさらなる蓄積を生む内的過程を通じて、資本の集中・集積と産業予備軍の累積が加速されるという内部崩壊、自己崩壊の理論です。

さらに単純化した話にありますが、この第一巻体系は、フランス語圏とドイツ語圏の読者に、それぞれ強力なメッセージを発信することになります。実際にはずっと複雑な関係になりますが、ここでは、フランス語圏には主として「搾取論」、ドイツ語圏には主として「崩壊論」というシェーマで考えてみます。

「搾取論」のコアをなすのは、“等価交換のルールが破られるから利潤が生じるのではなく、逆にそれが貫徹するから生じるのだ”という逆説です。利潤は市場の不完全性から生じるのではなく、そのルールが労働力商品にも貫徹するから生じるのだとすれば、市場を残して搾取を廃絶することは「できない相談」だということになります。このテーゼは、フランス語圏の読者に、プルドン型の市場社会主義から手を切るように勧めるものです。

後半の「崩壊論」のコアをなすのは、“資本主義は発展すればするほど、その内部に矛盾を累積させ自らの限界を露呈する”という逆説です。この矛盾が生産力上昇に伴う内的必然性によるものだとなれば、外部からこれを押しとどめることはできないこととなります。これは、普通選挙を通じ議会における労働者の発言力の強化を目指すラッサール型の上からの改良主義、社会民主主義から手を切るように、ドイツ語圏の読者に勧めるものということになります。

しかし、二つのメッセージはそれが向けられた言語圏では、この「書かれ方」どおりの「読まれ方」はされなかったようにみえます。ところが、批判の対象が未成熟なロシア語圏では、「市場社会主義」批判は「市場の廃絶」＝「計画経済」、「社会民主主義」批判は「議会参加型改良主義の困難」＝「政治革命」というかたちに脱文脈化され、書かれたとおりに読まれ、ソ連型社会主義に結晶していったのです。

極端に図式化したかたちですが、これが『資本論』の最初の「読まれ方」だったと私は考えています。

### 3 『資本論』 50 年

■帝国主義論世代 ここで、時計の針を『資本論』50年の世界に進めてみます。『資本論』50年の1917年は、レーニン(1870 - 1924)の『帝国主義論』元年でもあります。ほかにもローザ・ルクセンブルク(1871 - 1919)やルドルフ・ヒルファーディング(1877 - 1941)など1870年代生まれの世代の読者は、資本主義が大きく変わったという歴史的事実をはっきりと認識していました。もちろん、「帝国主義論世代」は、『資本論』全三巻を読むことができたし、また当然読んでいたのですが、しかし、『資本論』の読み方という点では、バルンシュタインやカウツキーのような50年代生まれの「修正主義論争世代」が定着させた第一巻完結型の「読まれ方」から抜けだせなかった、これが私の申し上げたいポイントです。

第一巻完結型の崩壊論的な「読まれ方」は、コアとなる金融資本の概念を、巨大産業資本と銀行の癒着というかたちで、集中・集積論の延長線上に位置づけたのです。もちろん、この世代の内部で激しい論争があったのであり、一概にこう決めつけるわけにはゆかないのですが、レーニンの『帝国主義論』は、「生産の集中化と独占の出現」から出発し、ヒルファーディングの『金融資本論』における独占体の形成というポイントの強調不足を指摘し(第3章冒頭)、帝国主義が選択可能な政策の一つではなく、この段階の資本主義に必然的な運動であり、列強間の不均等発展から植民地再分割をめぐる戦争が不可避となると、カウツキーの「超帝国主義論」を批判するものでした。

『資本論』の「読まれ方」は旧式でしたが、資本主義が新たな段階に突入し、金融資本が植民地支配を必然的に生み出すというレーニンの『帝国主義論』の現実認識は画期的でした。マルクスが資本主義成立の可能性を考えていたのは西ヨーロッパ、どんなに広げたとしてもせいぜいロシアや合衆国の範囲までで、『資本論』そのものをどんなに丹念に読んでも、朝鮮や台湾を植民地化しながら形成されていった日本資本主義をそこに読みとることはできません。『資本論』を逸脱した20世紀のもろもろの歴史的現象を『資本論』と結びつけたのは、レーニンたち「帝国主義論世代」のマルクス主義者たちでした。

「マルクス＝レーニン主義」という呼称は、いろいろな意味合いをもちますが、レーニン主義の追加は、社会主義の運動が、資本主義諸国の国境をこえて、第三世界を席捲してゆくのに不可欠だったと私は考えています。19世紀の「マルクス主義」は、「マルクス＝レーニン主義」となることで、はじめて20世紀の歴史を動かしたのです。

すでに歴史上の出来事となった「マルクス＝レーニン主義」に対して、その功罪を現在の基準で論評してもはじまりません。この主義が、少なくとも20世紀の植民地独立、民族解放の運動にとって決定的な役割を果たしたことは、善悪の問題ではなく、歴史的事実の問題です。資本主義の本体と非資本主義の世界の間に埋めがたい溝が存在し、そこに政治的な支配・従属の軋轢が不可避であったこと、そのなかで「マルクス主義」はその軸足を第三世界の側に移すことでイデオロギーとしてのパワーを発揮したこと、そのためにソシャリズムがナショナリズムとの結合を強めてゆかざるをえなかったこと、これらは

20世紀のマルクス主義が帯びざるをえなかった歴史的な性格だったのです。しかし、この「20世紀のマルクス主義」の基盤が瓦解したこと、これについては『資本論』150年のところでお話ししたいと思います。

## 4 『資本論』100年

■日本における「読まれ方」 『資本論』100年については、日本にスポットをあてて考えてみたいと思います。この1967年は、ある意味で、日本における『資本論』の「読まれ方」50年の**総決算**の年でした。

『資本論』の日本語訳は、『資本論』50年の直後に登場し、それはロシア革命や昭和初期の廉価本ブームの影響などもあり、急速に一般に普及したようです。高島素之(1886-1928)がカウツキーの『資本論解説』...これは一巻完結型の解説書の典型ですが...を邦訳して好評を博したのは1919年(DK 53年)のこと、これをうけて高島訳の『資本論』は1920年(DK 54年)から第1巻、第3巻、第2巻の順に、ウンターマンの英訳(1906-09)からの重訳だったそうですが、全三巻が立てつづけに刊行されました(長谷部[1867]23)。レーニンの『帝国主義論』の全訳は、1924年(DK 58年)に青野季吉(1890-1961)の訳で出版され(宇佐見[1985]216)、ヒルファードィングの『金融資本論』は、1925年(DK 59年)に猪俣津南雄(1889-1942)による解説書のほうがさきに出版されたようですが、すぐ続いて1927年(DK 61年)に林要(1894-1991)による全訳が刊行されました。

日本における「読まれ方」の特徴は、① はじめから**全三巻がセット**で読まれた点、しかも②『**帝国主義論**』や『**金融資本**』と**同時並行的に**読まれた点にあります。

このような「読まれ方」をするとどうなるのか。私の結論は、これによって第一巻完結型の自己崩壊論にかわって、資本の競争を通じて社会的再生産が編成処理できるという**資本主義の自立性論**が浮かびあがってくるものです。もちろん、「自立性」といっても、古典派経済学が考えたような需要供給の原理で予定調和的に均衡が保たれるというのとは違います。恐慌を通じて内部の矛盾を解決してゆく動的な発展ということになりますが、ともかく崩壊論とは異なる資本主義像が浮かびあがってきたのです。そして、この自立的な原理像に対して、『帝国主義論』の発展段階をどう位置づけたらよいか、という問題も浮上してきます。

これは私の個人的な感想になりますが、こうした日本における『資本論』の「読まれ方」には、『資本論』が大学で「経済原論」として講義されたことがけっこう重要な意味をもったのではないかと考えています。この後は、Webのほうで書きましたように.... といって、端折ってもよい。とはいえ、「官学」においてははじめ、『資本論』はなかば禁書扱いだったようで、たとえば東京帝国大学では、1924年に山田盛太郎が外国語経済学の教科書として『資本論』を使用しようとして反対にあい、リカードの『経済学原理』を用いることとなったそうです(日高ほか[1969]112)、また1925年に矢内原忠雄(1883-1961)が「<sup>ドイツ</sup>独逸経済学」の教科書に『資本論』を指定したところ、教授会で異議がでて、ヒルファードィングの『金融資本論』に差し替えたときいています(経済学部部局史編集委員会『東京大学

百年史』[1986] 74)。

ただ同じ官学でも京都帝国大学は事情がやや違っていたようで、そこでは河上肇(1879-1946)が1908年から1928年まで隔年で「経済原論」の講義を担当していたそうですが、はじめその講義内容は「非・マルクス経済学」のものだったが、河上の赴任と同時に編入してきた榊田民蔵をはじめとしたマルクス主義者の受講者の批判を真摯に受けとめるなかで、最後は『経済学大綱』のようなマルクス経済学の内容になっていったようです。引用部分、スライド表示河上は、最後の年の講義をもとにしたこの著作を「『資本論』の解説のごときもの」(河上[1928] 138)だと謙遜していますが、ホンネは違っていたようで、「従来『資本論』の解説書としては、カウツキーのものが広く行われてゐるけれども、あれは第一巻の内容を主としたもので、第二巻、第三巻の内容については僅かな追加が試みられてゐるに過ぎない。私の著作は『資本論』の全三巻に亘る内容をほぼ平均的に紹介しており、且つマルクスの研究法および叙述法を出来るかぎり尊重してゐる点において、善かれ悪しかれ、まだ世界にその類本がないと考えてゐる」と自負しています(河上[1928] 494)。この自負はもつともなものだと私は思います。

たしかに、たとえ内容が同じでも、原論として講じるのと、学説史として『資本論』を紹介するのでは大違いで、原論として講じるとなると、たとえ「祖述」であっても、不特定多数の聴衆に向かって、その内容が真理だと自ら宣言しなくてはなりません。熱心な受講者を相手に、20年あまりにわたり講義を続けられた大学という環境は、マルクス経済学の「経済原論」の形成にとって貴重なものだったと思います。こうした場で『資本論』の全三巻を講じれば、体系全体に対する認識も自ずと深まってゆきます。

■三巻をセットで読む スライド2枚で、解説する。ポイントは二つ、一つ目は「流通論」の独立化から「流通論」「生産論」「分配論」のかたちへ。二つ目は「帝国主義」論の位置づけ、です。

それはともかく、このように三巻セットで読むと、諸階級で終わるにせよ、景気循環で終わるにせよ、ともかく、自己崩壊論にかわる資本主義の自立性論が浮かびあがってきます。事実、河上の『経済学大綱』は、全三巻を体系化するという点では、すでにかなり進んだものになっています。『資本論』第一巻を二つにわけ、前半の商品・貨幣・資本を一つの篇として独立させるという考え方の片鱗はもう現れています。第一巻の内容が、第1篇「商品および貨幣」と第2篇「資本の生産過程」に二分されているのです。

たしかに第3章「貨幣の資本への転形」は第1篇「商品および貨幣」ではなく、まだ第2篇「資本の生産過程」のほうに位置づけられています。この章の第1節「資本の運動の一般的形式」のなかには、産業資本の「形式」 $G - W \dots P \dots W' - G'$ がもう登場しています。この「形式」は『資本論』第一巻には最後まででてきません。第二巻第1篇「資本の諸変態とその循環」のなかで「貨幣資本の循環」としてはじめてでてくるものです。河上がやったように、これを産業資本の「形式」として「貨幣の資本への転形」に導入することは、第一巻だけを読んでいるとなかなか気づかないことなのですが、全三巻を続けて読めばごく自然に思いつくことです。

些末なことに思えるかもしれませんが、『資本論』第一巻ではいったん提示された「資

本の一般的定式「 $G - W - G'$ 」は、等労働量交換に反するものとして取り消され、資本の運動が自立した「形式」として描かれることは最後までありません。この「形式」が欠けていたために、商品、貨幣とならぶ第三の範疇として資本を定立することがなかなかできなかったのです。河上がこう書いているというつもりはないのですが、『経済学大綱』の第一篇「商品および貨幣」は「商品、貨幣および資本」という宇野弘蔵の「流通論」の一手手前までできているように私には読めるのです。

宇野が河上の『大綱』を読んでいたかどうか、それはわかりませんが、「流通論」が分離できれば、そこで明らかにされた市場で、どのように社会的再生産が編成できるのか、という問題が浮上するわけで、「流通論」「生産論」「分配論」という、宇野の経済原論の枠組みが調うわけととのです。実際にはこんな単純な話ではないのですが、私が申しあげたいのは、“『資本論』が三巻体系で読まれると自立性論になる”というのは、単に三巻をただ並べればすむ話ではなく、こうした「流通論」の分離という読み込み、再構成が必須だという点です。

ともかく「流通論」の独立化は、河上の『大綱』にも、そうみようと思えばその萌芽はあるのですが、決定的な問題は『帝国主義論』の位置づけです。『大綱』の場合、『資本論』全三巻を網羅的に解説し、第四篇「資本の総過程」で利潤、商業利潤、利子、地代を順に説いた後、最後の最後に「自由競争はその反対物たる独占に転化する」として、『資本論』にはない第16章「金融資本」が追加されています。

この追加は、ある意味では自然な展開に見えるかもしれませんが。事実、その後のマルクス経済学の主流は、独占資本や金融資本の「原理」を『資本論』第三巻の連続面に位置づけてきました。しかし、これでは最後の最後で、第一巻完結型の崩壊論に戻ってしまいます。せっかく全三巻が読める環境にあっても、『帝国主義論』における崩壊論的な『資本論』の「読まれ方」がくびき転となり、河上の『大綱』は最後のところで、全三巻ベースで自立した資本主義像を読みとることができずに終わります。

宇野による「読まれ方」は、ここところが決定的に違うのです。資本主義の自立性を解明する原理として『資本論』が全三巻セットで読まれるようになるには、『帝国主義論』との関係が決定的になります。『帝国主義論』に描かれているのは具体的な統計データをもとに語る事ができる「現象」であり、この背後に『資本論』の抽象化された「本質」が控えているのだ、という「読まれ方」です。これは、資本主義的蓄積 → 集中・集積 → 独占 → 金融資本 という時系列で『資本論』 → 『帝国主義論』を読むのではなく、共時的な関係において「現象」に対する「本質」として『資本論』を読むことを意味します。

全三巻を自立性論として読むことには当然、次のような疑問がでてくると思います。このように資本主義の自立性を説くことは、たとえそれが恐慌を媒介とした動態的なものだとしても、けっきょく古典派の原理論に逆戻りするだけではないか、という疑問です。たしかに、宇野の『原論』だけを読むと、必ずこのような不満を覚えると思います。しかし、『資本論』全三巻をセットで読むということは、同時に『帝国主義論』とセットで読むということでもあります。『帝国主義論』がセットとしてあるから、はじめて『資本論』全三巻を資本主義の自立性論として読むことができるのです。



■宇野理論 宇野の場合、『資本論』と『帝国主義論』を結びつけるキーワードは「不純化」です。現実の資本主義の歴史的発展をおってみると、ある時期までは『資本論』全三巻をベースに演繹的に構築された「純粋資本主義」に接近する「純粋化の傾向」が認められるが、19世紀末に後発の資本主義が台頭するなかで、この傾向は鈍化、逆転するようになったというテーゼです。「純粋資本主義」が資本主義の自立性を示すとすれば、そこからの乖離は、資本主義が自立性を失ったことを意味します。「純粋化の傾向」を示した自由主義段階が資本主義の発展期であるとすれば、経済政策や社会制度など、商品経済以外の要因への依存を強める帝国主義段階は資本主義の没落期だという結論がでてきます。原理論における自立性論は、反対命題として、崩壊論にかわる没落期論が用意されているのです。

これはラフに言えば、第一巻完結型が純粋な資本主義なら矛盾が累積して内部崩壊するというのに対して、ホントの意味で純粋な資本主義ならどこまでも自立的に発展してゆけるはずだが、現実の資本主義がそこから離れてしまったところに、資本主義の歴史的限界が現れているのだ、という裏返し的主張になっています。このラディカルな主張は、戦前、東北帝国大学で「経済政策論」を担当していた宇野が、1936年にたまたま1年だけ「経済原論」の代講を引きうけたことに由来するそうですが、戦後になって『経済原論』として、上巻が1950年に、下巻が1952年に公刊されました。しかし、宇野の主張は、その後、長らく異端視されてきたのですが、それが、日本のマルクス経済学研究の表舞台にたつことを許されたのが『資本論』100年のころ、ということになります。

## 5 『資本論』150年

■独占資本主義論・市民社会派・宇野理論 それからさらに50年、『資本論』150年の今年、日本における『資本論』の「読まれ方」をいま一度読みなおすよい機会です。『資本論』100年のころに、ある意味でピークを迎えた日本における『資本論』研究の流れは、その後の50年間に大きく変質してゆきました。

すでにみたように、河上の『経済学大綱』は『資本論』三巻の概説のあとに「金融資本」という一章を追加するかたちになっていましたが、戦後も基本的にこのようなかたちで、自由競争の資本主義のあとに「独占資本主義」を接ぎ木する「独占資本主義論」が、いくつかのバリエーションはありますが、基本的にマルクス経済学の主流でした。しかし、『資本論』100年後の50年をふり返ると、「独占資本主義論」では『資本論』の研究に大きな進展はみられませんでした。『資本論』は自由主義段階の競争的資本主義の原理であるすれば、いつまでもそれに拘る必要はないわけです。研究の重心は独占資本主義の現実分析に移行してゆき、『資本論』を新たに読みなおす意義は薄くなります。こうして、「独占資本主義論」は『資本論』レベルの理論研究から徐々に離れてゆき、たとえば「大戦後資本主義は、資本主義経済一般の基本法則を解明したK.マルクス『資本論』のような理論体系化は不可能である」（井村[2016]3）という、ある意味では当然な結論にいたったといえます。

「独占資本論」に対する、もう一つの別の流れとして「市民社会派」がありました。する「市民社会派」です。そこでは、学説史的な観点から『資本論』を読み込み、たとえば「領有法則の転回」などの所有論的な観点から『資本論』を捉え返し「個体的所有の再建」として社会主義を捉える試みなどがなされてきました。しかし、この流れは、1980年代にはいと急速にユーロ Kommunismus との接近を強め、フランスのレギュラシオン学派を高く評価するようになり、やがて理論のベースも『資本論』からレギュラシオン学派と同じケインズ経済学的マクロ理論、さらにポストケインズ派の経済学にシフトしてゆきました。

いずれにせよ、戦後日本の『資本論』研究をリードしてきたこれら二つの潮流が、『資本論』100年後のここ50年間、固有の意味での『資本論』研究のモチベーションを徐々に失っていったのに対して、「宇野理論」は事情を異にしていました。そこでは原論研究の比重が高くなる独自の理由があったのです。「独占資本主義論」でも「市民社会派」でも、基本的に第1巻ベースで『資本論』が崩壊論的に読まれてきたのですが、これに対して「宇野理論」では、新たに全三巻ベースで「純粋資本主義」を構築してみせることが喫緊の課題でした。それは戦後の日本資本主義の現実を分析する基礎として、独自の意義を与えられたのです。

オリジナルの「宇野理論」は、第一次世界大戦にいたる古典的帝国主義の時代を対象としたものでしたが、その内容は高度成長期の日本の現実に妙にフィットしていました。1955年以降の高度成長期の賃金上昇を伴う循環的成長は、激発恐慌を欠いてはいましたが、労働力商品の基本矛盾を基礎とした原論の景気循環論と重なって見えました。こうしたなかで、大内力のユニークな『国家独占資本主義』なども登場したわけです。

高度成長が終わった後も、政府の市場への介入は福祉国家のかたちをとって拡張しつづけてきましたが、全三巻体系をもとに再構築された純粋資本主義に照らせば、冷戦体制下における福祉国家の形成と発展も、古典的帝国主義の時代における経済の軍事化とは異なる不純化の別の形態として一貫させて位置づけることができたのです。そして、こうした福祉国家型資本主義の延長線上に、脱資本主義化、革命なき社会主義を遠望する論者も少なからずいたのです。純粋資本主義からさまざまなかたちで乖離する多様な類型に帝国主義段階の資本主義を分類する類型論型の段階論も現われ、これに対応して、経済原論の中味も、宇野が重視した資本主義の生成・発展期の歴史的な「純化傾向」から切り離し、商品経済的な論理で説けるところまで徹底して説くという「体系的純化」に特化するかたちで、ますます抽象度を高めていったのです。

■プレートの変換 しかし、ここに断絶が訪れます。『資本論』100年から今日までの50年間、20世紀の資本主義は大変換を遂げました。新たな新興資本主義の勃興です。それは、20世紀の先進諸国の体制を根底から揺さぶるものでした。宇野による資本主義の発展段階論は、あくまでこの20世紀の先進資本主義諸国を対象とするものであり、そのもとでずっと支配・抑圧されてきた諸国・諸地域のなかから、新たな資本主義が勃興することを想定したものではありません。この新たな資本主義化の動きは、宇野の発展段階論における資本主義の生成・発展・没落という「段階」の延長上に位置づけられるものではありません。その点では、宇野の「段階」概念とはっきり区別し、それらをのせたより大

きな「プレート」の存在を想定したほうがよいと考えるようになりました。

「プレート」というかどうかはともかく、20世紀末におけるこのような構造転換を捉えようとする、宇野理論が共通の基盤としてきた、資本主義の生成・発展・没落という三段階の段階論を再構成せざるをえなくなりますが、それはそれだけですむものではありません。三段階説の基底をなす純粋資本主義論型の原理論の再構築が不可避となります。すなわち、宇野による『資本論』の「読まれ方」の再検討にまで進まざるをえなくなるのです。

**■純粋資本主義論の問題点** 20世紀末のプレートの交代を捉えるにはどうしたらよいのか。こうした目でみたとき、“純粋資本主義論における『資本論』の「読まれ方」がかかえる最大の難点、それは、資本主義の自立性を経済原論の内部に封じ込めた点にある”これが私の結論です。こういった思いきった言い方は、必ず誤解を生むので、とりあえず三点を断っておきます。

一つ目に、私は純粋資本主義論におけるような「読まれ方」が不可能だといっているわけではありません。20世紀のプレートが支配しているなかでは、それは最善の「読まれ方」だったことを再度強調しておきます。

二つ目に、この「読まれ方」の核心である『資本論』の「体系的純化」というアプローチを否定しているわけではありません。はじめに述べたように私は長い間「経済原論」の講義を担当してきましたが、そのなかで、商品経済の基礎をなす用語を明確に定義し、前提を明示して、演繹的推論を通じて体系を構成する方法を外したことはありません。

三つ目に、資本主義の自立性を否定しているわけではありません。難点は、純粋資本主義を想定し、その内部で資本主義の自立性を説明するアプローチにあるのです。

**■変容論的アプローチ** ではどう読むべきなのか。逆説的な言い方ですが、基本は“『資本論』に対して純粋資本主義論以上に演繹的な論理をより徹底して適用してゆく”ことです。そうすることで、一般的な商品経済的關係では特定できない「開口部」が、原理論のうちに浮かびあがってきます。

**■価値形態論の開口部** 詳しく話す時間はもうありませんが、たとえば、『資本論』の価値形態論は、商品にある大きさの価値が内在するという前提から、論理的に貨幣の必然性を導出する演繹的な理論の典型といってよいと思いますが、そのなかで「簡単な価値形態」→「拡大された価値形態」→「一般的価値形態」という展開と、「貨幣形態」への移行との間に、論理レベルの違いがあることはだれしも気づくと思います。内在的価値の存在が、単一の「価値物」による統一的な価値表現を生み出すことと、この価値物が金商品となることの間には論理レベルにギャップがあります。逆にいえば、貨幣の基本は「価値物」の単一性までであり、この条件を満たせば不換銀行券も金貨幣と同じ次元で、貨幣として機能しうることとなります。たしかに、抽象的なレベルで導出された「価値物」の概念に照らせば、両者はいずれも不完全な面を残すわけですが、それは、商品経済的關係だけで構成された資本主義の原理像のほうが、開口部を抱えた不完全な存在だからであり、現実の貨幣の不完全性はこうした原理的不完全性の反映なのです。資本主義は原理的にみ

ても、こうした開口部に外的条件が外挿されることではじめて作動するのであり、価値の内在性から導きだされる価値物としての貨幣は、金本位制や管理通貨制など、異なった条件によって、現実処理可能な貨幣に実装されるわけです。

こうした開口部は、演繹的論理を徹底させるかたちで、純粋資本主義の原理論を再読すれば複数発見することができます。資本主義は商品経済的關係だけでは一義化されない複数の開口部に、異なる外的条件が作用することで、多関節的に変容することになります。

このような変容論的アプローチで原理論を組み立ててみると、資本主義の自立性の理解も純粋資本主義とは異なったものとなります。たとえば、もし商品経済的な関係だけで構成された資本主義ならば、制度的支えをいっさい必要としない金貨幣の世界になるというかたちで、資本主義の自立性を狭く規定する必要はなくなります。本来の貨幣は金貨幣であり、不換銀行券が支配的となった現実を不純化とみる必要もなくなるわけです。内在的価値を統一的に表現するという基本は満たさなければなりません、それを満たせば、金本位制であれ管理通貨制であれ、その他の制度であれ、貨幣の開口部は埋めることができます。

■資本主義の自立性は段階論レベルで たしかに商品経済の論理は強力であり、資本主義の原理像は唯一この動力によって演繹的に構成できるものです。別の第二、第三の動力が存在するわけではありません。しかし、この強力な動力を以てしても、演繹だけでは一義的に説明できない開口部が存在するのです。こうした開口部を制度や慣習などの外的諸条件で埋めることで、資本主義は歴史的な諸相をともなって、**段階論のレベルで自立する**のです。『資本論』を三巻体系で読むことと、純粋資本主義論として読むことは別であり、資本主義の自立性は『資本論』を変容論的に読むことではじめて捉えうる、これが私の結論です。

この変容論的アプローチによる原理論の再構築をふまえて、資本主義の歴史的発展を捉えかえすと、生成・発展・没落という単一起源説的な段階論にかわる、資本主義の多重起源説的なプレート交替論が再構成できるという話が続くのですが、これはここでは割愛し、最後に社会主義の問題について一言述べて終わりにしたいと思います。

■空白の社会主義 資本主義の自立性を原論レベルに閉じ込めた純粋資本主義論は、その副産物として、社会主義に関して—積極的に意図した結果ではないかもしれませんが—商品経済の論理を全廃した“本来の社会主義”を、いわばネガとして内包しているのです。原理論によってあらゆる社会の基礎をなす「経済原則」が全面的にわかるのだから、これを市場を介さずに直接意識的に実現できる、これが社会主義だという考え方です。

これに対して、もしその自立性が開口部を独自に埋めるかたちではじめて実現されるものと考え、社会主義に関してもこのような原理的規定を与えることはできなくなります。抽象的・一般的なかたちでせよ、“本来の社会主義”を想定すること自体、変容論的な原理論をベースにするかぎり困難となります。

社会主義の問題は、現実存在する開口部をどのように埋めるのか、にかかってきます。どこまで、どのようなかたちで市場にゆだねるのか、どのような貨幣制度を設計する

のか、労働市場をどのように補完するのか、再生産されない自然環境をどのようにモノの再生産とリンクさせるのか、等々の問題をめぐり、コンシステントな社会的な価値判断を与えるイデオロギーとして、社会主義は現前するのです。

開口部の埋め方において、社会民主主義は国民国家と複雑な関係をつくりだすことになります。ここには、国家の壁をつくり、地域の壁をつくり、家庭という壁をつくり、個人の壁をつくりだすモメントが潜んでいます。先進資本主義諸国の社会主義への移行は、たえず外部との間にフリクションを生み、排外主義を誘発します。現存の社会民主主義が社会主義たりうるかどうかは、この点で、イデオロギーの問題に深く結びついているのです。

こうして変容論的アプローチによる資本主義の原理像は、そのネガとして、『資本論』の歴史的な「読まれ方」によって駆逐された、プルドン型の市場社会主義やラッサール型の国家社会主義（社会民主主義）を再度批判の俎上に呼び戻すことになります。こうした批判を通じて、開口部の向こうに“空白の社会主義”がはじめてみえてくるのです。

今日、新興資本主義国の台頭のもとで、旧先進資本主義諸国では新自由主義への外圧が高まるなかで、同時にこれに対抗し資本主義からの離脱をもとめる内圧も高まっています。この離脱の運動を「社会主義」とよぶことに本来なんの問題もないはずですが、これに躊躇を覚えるのは、20世紀のプレートを対象に『資本論』が読まれ、純粋資本主義のネガとしての“本来の社会主義”がなお払拭できないためなのです。先進資本主義国の内部で高まりをみせるさまざまな社会民主主義はまぎれもなく社会主義です。必要なのは、多様な社会民主主義の流れのなかに身をおき、自らのイデオロギー性をはっきり意識し、その限界を克服してゆくことです。

資本主義が再び大きな地殻変動に直面している現在、私の変容論がどこまで有効なのかはわかりませんが、『資本論』が今日、新たな「読まれ方」を求めていることはたしかです。『資本論』は問題集であっても、解答集ではありません。150年後の今日なお、問題をつくるための問題集として読みかえすことで、その「読まれ方」の履歴のうちに、新たな意義を見出すことができるのです。

## 引用文献

Marx, Karl, *Das Kapital* Band I, 1867, nach der vierten Auflage 1890, in *Marx-Engels Werke*, Band 23, 1962

Marx, Karl, *Das Kapital* Band II, 1885, in *Marx-Engels Werke*, Band 24, 1963

Marx, Karl, *Das Kapital* Band III, 1894, in *Marx-Engels Werke*, Band 25, 1963

{Marx, Karl} 「カール・マルクスとの新聞『サン』の通信員ジョン・スウィントとの会見メモ」(1880年9月6日)『マルクス=エンゲルス全集』補巻4、大月書店、1977年所収

Zola, Émile, *L'Argent*, 1891, 野村正人訳『金(かね)』藤原書店、2003年

伊藤誠『マルクス経済学の方法と現代世界』櫻井書店、2016年

猪俣津南雄『金融資本論』希望閣、1925年

井村喜代子『大戦後資本主義の変質と展開 — 米国経済戦略のもとで』（北原勇 協力）有斐閣、2016年『マルクス経済学の方法と現代世界』櫻井書店、2016年

宇佐見誠治郎『学問の五〇年』新日本出版、1985年

宇野弘蔵『経済学方法論』東京大学出版会、1962年

宇野弘蔵『経済原論』岩波書店、1964年

宇野弘蔵『宇野弘蔵著作集』別巻、岩波書店、1974年

大内力『国家独占資本主義』東京大学出版会、1970年

小幡道昭『経済原論 — 基礎と演習』東京大学出版会、2009年

小幡道昭『マルクス経済学方法論批判 — 変容論的アプローチ』御茶ノ水書房、2012年

小幡道昭「宇野理論とマルクス」鶴田満彦・長島誠一編『マルクス経済学と現代資本主義』櫻井書店、2015年

河上肇『経済学大綱』1928年『河上肇全集』15 岩波書店、1983年所収

河上肇『資本論入門』1929年『河上肇全集』続2-3 岩波書店、1984年所収

経済学部部局史編集委員会『東京大学百年史 経済学部』1986年

日高普ほか編著『日本のマルクス経済学』上 下、青木書店、1967,1968年